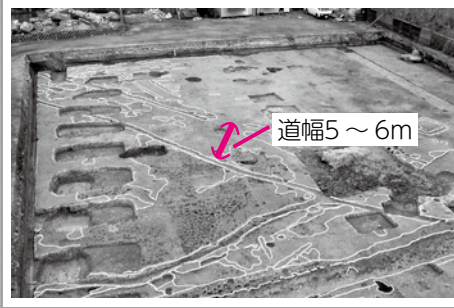


▲出土した須恵器や土師器  
(松原市教育委員会提供)▲検出された斜向道に平行する側溝跡  
(松原市教育委員会提供)▲新町南公園の案内碑  
(西南出入口)▲新町南公園 (南新町3丁目)  
西北出入口側のバラ花壇から。飛鳥時代の建物跡や斜向道跡  
南新町遺跡から旧と畜場跡へ

市の人権交流センター(はーとビュ-、「歴史ウォーク」<sup>245</sup>)から西へ少し進むと、府道大阪一狭山線に面して新町南公園(南新町三丁目)が見られます。布忍小学校や阪南中央病院の南側にあたります。

公園は、面積二万余mの広さで、市内の都市公園、いわゆる近隣公園としても設備の整った景観を形づくっています。園内は、噴水のある親水広場を中心とする多目的広場を中心に、回りをバラ花壇で彩り、訪れる人々の目を楽しませています。外周には、滝が落ちる流れ池や四阿、砂場や複合遊具を備えた遊戯広場、バスケット広場なども設けられています。

公園は平成十三年(二〇〇二)に、今のような形に整えられましたが、開園に先立ち、松原市教育委員会は平成八年(一九九六)十一月から翌九年三月にわたって、同地の発掘調査を行いました。その結果、六世紀後半〜七世紀全般の古墳時代後期から飛鳥時代を中心とする遺構や遺物が主に検出されました。南新町遺跡とよんでいます。

遺構としては、二間×五間の掘立柱建物跡の住居や総柱を持つ二間×三間の倉と思われる掘立柱建物跡が見つかりました。近くからは牛足や鋤の跡が残った水田耕作跡や溝跡・

道路跡なども発見されました。

遺物としては、柱材の残欠のほか、ここで生活していたと思われる人々が使った須恵器の坏、高坏、甕、皿などが出土しました。また、一般の農民が使わないような金銅製耳環(銅芯に金メッキを施してつくられた耳飾り)や水晶の原石も見つかり、この地域には、これらを使用できる力のある人が住んでいたか、あるいは製品をつくる工房のような性格を持った集落があったか、検討されるところです。

調査面積が一、八〇〇mと限られていたことから、遺跡の全容ははっきりしませんが、このうち、道路跡は、興味が持たれます。道路の幅は五、六mで、それほど広いものではありません。現府道大和高田一堺線と大阪一狭山線の交差点から、阪南中央病院内を斜めに北東から南東に横切る形で、新町南公園を斜向している形と推定される古道が見つかったのです。六世紀末から七世紀初めごろと考えられます。道路側溝と思われる斜向する二本の平行する溝が検出されていることから推測されます。

道路幅が狭いことから、飛鳥時代に設置されたと考えられる最古の官道といわれる竹内街道(丹比道か)ややや後の長尾街道(天津道か)を結んだ脇道であったかもしれません。

古道は河合方面に延びていたらしく、この時期前後のものと考えられ、

学校給食センター建設で見つかった人工運河の丹比大溝や役所跡(歴史ウォーク<sup>166</sup>)への交通ルートでもあった可能性があります。

奈良時代の八世紀頃に掘られたと考えられる大溝跡(幅二・五m・深さ八〇cm)も須恵器、坏、甕・壺などともに見つかりました。

なお、同地は江戸時代から明治前期を通じ、河内国丹北郡更池村で農地となっていました。明治初期になると、遺跡の発見された近くで、更池の住民が牛をと畜するための小屋をつくっていたといわれています。

その後、更池村が近隣の向井村・清水村・高木村・東代村と合併して、中河内郡布忍村となって以後の大正五年(一九一六)六月に、布忍村がと畜場を村営としました。大正十五年(一九二六)七月には、現公園の地に同施設を移転したのです。さらに、昭和三十年(一九五五)二月、布忍村が松原町・天美町・三宅村・恵我村と合併して、松原市となってからは、市立として整備がはかられていきました。

しかし、平成元年(一九八九)四月、新松原食肉地方卸売市場が河合にオープンしたことにもない、旧と畜場が閉鎖されたことになったのです。その跡に開園したのが、新町南公園です。西南側出入口には、これらの歴史を記す案内碑も建てられており、人々の記憶の中にとどめています。